

父・総一の葬儀に寄せて

御礼の言葉

ある日突然、物言はぬ身体となる。共に語らふことも、共に笑ひ合ふことも、共に食すことも、共に飲み交はすこともない。死と言ふものの恐ろしさです。我々生きとし生けるものは、生まれたその瞬間から、その一番恐ろしい死に向かって歩み始めるのです。生きるとは死に向かふことです。

しかし何故に、我々は死の恐怖をいささかも感ぜず、ただ生きるといふことに、精一杯格闘することができるのか。紛れもなく、死に一番近いところに親が居て、死の恐怖と戦ひながら、後に続く子や孫のために、死の恐怖を取り除いているからです。父の死により、私は始めて親になります。

齢一〇二、父は完全燃焼の後に、眠るが如く呼吸を止めた。明治四十四年十二月八日島根県隠岐島に生まれ、大正・昭和・平成と駆け抜けた。その間、大阪市電気局・入隊、ハルピンにてウスリ河警備・再び大阪市電気局。そして再び入隊、黄河渡河・

台児莊の戦闘攻略、左胸部貫通銃創の負

傷。この時のことを父は自著（わたしの生きた道）の中で、「何くそ、何くそと言ふ言葉は、あの戦場で、一秒たりとも疎かにしない、必死の思ひが産んだ言葉である。傷痕から流れ出る生温かい血が、その流れが止まったら、あの世である。何くそ、何くそ、元氣を出せ、と心の中で絶叫した戦場の言葉である」と回想してゐます。その後の父の生き様はまさしく「何くそ、何くそ」に象徴されると思ひます。「何くそ」の反骨精神こそが父を支ゑた人生教訓でありました。

冬になると、父はよく左の胸を押さえて「痛い」と言つてゐました。その意味が分かったのは大学一年生の夏のことでした。始めて父と二人で、松江の酒屋で一杯飲んだ時でした。銃で撃たれて胸部貫通した時の、血がどくどくと流れ出し、更には匪賊によつて身ぐるみ剥がされ、尚氣力を絞つて匍匐前進した、といふ凄まじい物語でした。私は持つてゐた盃にぼろぼろと涙がこぼれました。以来父は、私の生きる支えで

あり、目標であり、人生の教師でありました。大いなる悲しみと共に、大いなる感謝の気持ちで、父を送りたいと思ひます。たくさんの人に支えられ、たくさんの人に見守られ、たくさんの人から一杯の愛をいただき、そして燃え尽きた父に代はり、心からの感謝と御礼を申し上げます。

行年 百四歳 俗名 波多 總一

法名 永隆院賢譽總俊居士

十二月十四日、四十九日の法要滞りなく執り行ひ、無事納骨式を終りました。ここに改めて、生前のご厚誼に心からの感謝を申し上げます、今後とも遺された私共のために変わらぬご厚情を賜りますやう伏してお願い申し上げます。尚心ばかりの御礼の御印をご送付申し上げます。ご笑納下さい。時節柄益々のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます、御礼のご挨拶とさせて戴きます。

平成二十六年十二月十五日

岡山県議会議員

波多 洋治

妻 豊子